

「輪廻転生」

## 「父と母」

大正十三年十月十六日。私の誕生日である。出生届は、日暮里字屋久となっている。父、森川治信。母、文（ぶん）能（のう）（通称ふみの）。寺の娘だった母の名は祖父が「経文」からとったものと聞いている。誕生の日の父の手紙が最近になって見つかった。三島市にある父の長兄に宛てたものだった。寺なのでたまたま長持ちの中に保存されていたものを、私の分だけいただいた。

「拜啓。御心配かけましたが、本日午後十二時二〇分女子出産、母子とも無事。

一番かるく生まれました。御安心下さい。私は今までになく、今度は心配いたしました。住む家も無く、喰うための仕事のない中で、知人の細君が三人もお産で死んだので、心細く想いましたが、幸いに無事でした。母は本日より家にきていますが、信子がようやく役に立ちます故、今どのように労力はかけさずにすむと思います。姉上にも静さんにも勝さんにも秀光さんにもよろしくお伝えください。

兄上様

治信

（注、信子は長女、当時十二歳。静さん、勝さんは姪と甥。）

関東大震災の中で身籠り、大変な時の出生ということである。父と母が愛しあい、この世に生を受けたことを大変幸せに思う。

お産は昼食時で、大変軽く、私はごお産婆さんの手の平に乗ったく

らい、小さかったと母から聞いていた。姉一人、兄三人、私、妹一人の六人兄弟だが、幼くして亡くなった姉（フユ姉ちゃん）が一人、母の心の深い傷だった。

数え年五歳の時に妹が生まれた。しわしわで赤い顔をして、お猿さんみたいだった。でも可愛くて、母にねだっておんぶさせてもらった。子守り娘のように手ぬぐいで髪をまとめ、おでこのところに結んでもらった。そろそろと歩いて隣りの家の出窓の下に入ったのを覚えてる。大人になって行ってみたら、その窓の低かったこと……。

妹が美味しそうに飲んでいたお乳が欲しくて母にねだったが、生温かく、甘くもなくて、ちっとも美味しくなかった。眼にごみが入った時、お乳をシューとかけてもらったが、一メートルぐらいとんで

いたと思う。

父は千葉の生まれで、男四人、女一人の五人兄弟の三男として生まれた。祖父が家をつぶし、兄弟ばらばらで育ったらしい。父は深川の乾物問屋に養子にいき、中学に行かせてもらったが、ある時、養子とわかり、家を出たと聞いている。いろいろと職を変え、私が育った頃は小さな町工場だった。

通いの職人、住み込みの小僧さんがいたが、食事は全部、母が作っていた。みな一緒に食卓を囲み、差別は一切なかった。母は小僧さんの洗濯もしてあげていた。ポンプで水を汲み上げていた時代だったのに……。

父は毎晩、晩酌をしていたが、いつも誰か遊びに来ていた。父の

あぐらの膝の中にすっぽりと入っていた記憶がある。酔うとふざけて頬ずりするが、伸びかけの髭が痛くて逃げ回っていた。

四、五歳の頃、歯が痛くて泣いていた。伯父が歯医者だったので、診て貰いなさいと言われても駄々をこねて、ご飯を炊いていた母の背中にはりついて泣いていた。仕事場からつかつか上がって来た父が、いきなり、びしゃ。飛んでしまったと思う。大泣きをして、おもしろいをしてしまった。幼くても自分が悪いと思ったのを鮮明におぼえている。

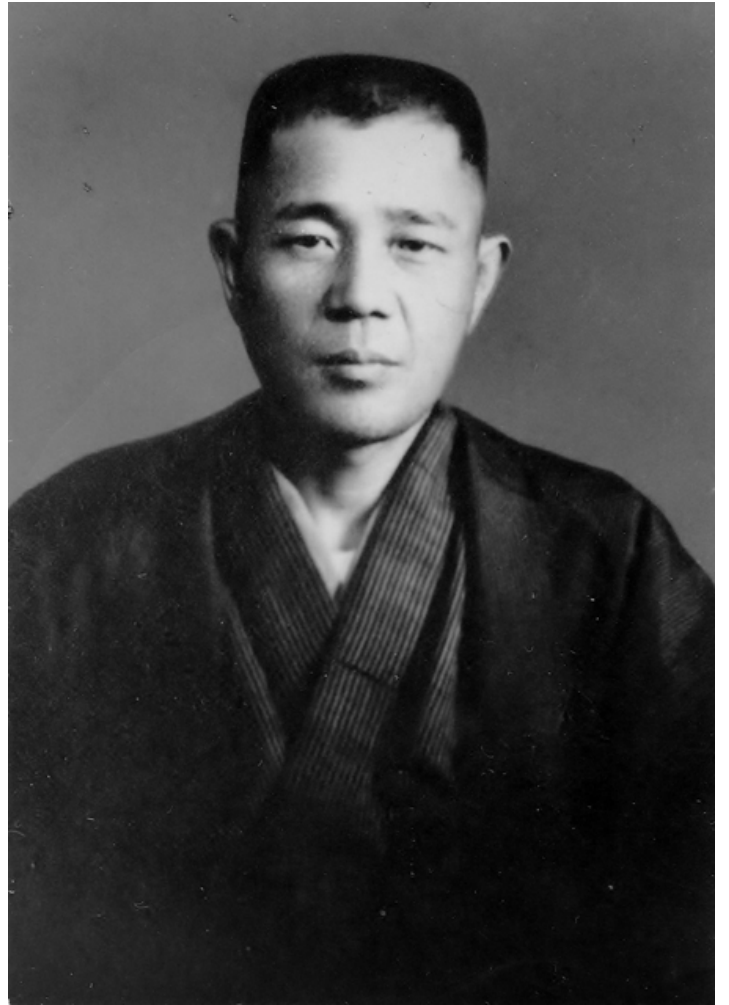
母に叱られた記憶が全くない。母は幼い時、生母を失い、十二歳くらいで父も亡くした。寺だったので後妻の方に育てられていたが、父親まで亡くなったので、両親と血のつながりが無くなってしまった。

親戚にもらわれて育ったが、養育費目当てで育ててくれた養母に随分いじめられたらしい。打ち身がでたこともあったらしいが、生前母の口から一言も聞いていない。溺愛とも言えるような母の子育ての陰にあった母の哀しみを想う。母は日頃から、人様に親切にする時、決してお返しをのぞんではいけない。その人から直接返ってこなくても、他の人から親切を受けることがあると…。

母はいつでも誰に対しても優しく親切だった。後年父方の従兄弟が「あんたのお母さんは優しかったね」と言ってくれ、大変嬉しかった。母が昼寝をしている姿を見たことがない。どんな暑い日でもきちんとして着物を着、帯を締めていた。髪はかもしを入れてふっくりさせた束髪。子供たちの着物を洗い張りし、みんな縫い返していた。母が張物をし

ているそばで、お人形さんの着物用の端布を兩戸に張ったり、針仕事  
のそばでお人形さんの布団や着物を母に教わりながら、縫っていた。  
貧しかったので、おもちゃ等あまり買ってもらった覚えがないが、母  
との時間は充分にあったと思う。妹と喧嘩すると「女の子二人しかい  
ないのだから、仲良くしなさいよ」と優しく注意するだけ。うちの娘  
たちは人が振り返る程の美人ではないが、人が振り返る程の不美人も  
ないないと言っていた。幼い頃、家に見える人たちの口から、妹と私  
どちらが、きれいになるかと言われて、結構傷ついた記憶がある。母が、  
それとなく顔を第一に考えなくてもよいと教えてくれたように思う。

寺で育った、幼い日の話をよくしてくれた。本堂の鐘になると祖父  
が、村人の誰々さんが亡くなったと言っているうちに、その家から知  
らせ来るとか（後年、主人と一緒に能登にある母の実家を訪ねたが、  
祖父は今蓮如様と慕われていたと聞いた）、おまいりの帰りに狼がつか  
いてくるが、転ぶと「拾った」と言って食べられてしまうとか、良い  
気持ちでお風呂に入ったと思ったら、肥溜めだったとか、狐の嫁入り  
の話等、何度聞いても面白くて、寝る前よくせがんだものだ。熱い夏  
の夜は寝付くまで団扇であおいでくれ、冬は寝衣をこたつで温めてく  
れた。母がいつ寝たのか、子供たちは知らない。眼が覚めれば、良い  
香りの朝食が出来ていた。



〔遊び〕

物心ついた昭和四年頃、私は足立区千住仲居町に住んでいた。わが家は四軒長屋の端から二番目だった。向かい側には同じような長屋があつたが、裏は広い原っぱだった。とんぼ、蝶々、バッタもいた。子供たちが走り廻るのに充分だった。

小さい時、どんな遊びをしていたらう。学校へ行く前は、もつぱらままごととかお人形さんごっこをしていたように思う。ミニユチュアのお鍋、茶碗、お皿、急須、湯飲みなど、縁日の夜店ですこしずつ買ってもらっていた。母から野菜の屑をもらい、小さな俎板(まないた)で刻み、お鍋で煮てから、「美味しいネ」と食べる真似をして……。

地べたにゴザを敷いて、近所の子供たちと仲良く遊んでいた。朝顔

の花をしばってピンクやブルーのきれいな色が出た時、凄くきれい  
だなんて感じたこと等思い出す。お人形さんは小さなセルロイドの  
キューピーさん、お腹がでているので着物は着せづらかった。少し大  
きくなって、洋服が縫えるようになったらスカートと上着を着せたの  
で、なんとか様になってきた。カウボーイの人形も出てきて、ゴムで  
できた帽子、長靴なども売っていた。今考えると高いものはひとつも  
なかったが、ふわふわと温かくて見ているだけで夢のように幸せだっ  
た。

家では二つ上の兄と四つ下の妹とよく遊んだ。「動物園ごっこしよ  
う」と兄が言い出し、私と妹は鳩にエサを上げる人。なんで動物園で  
鳩なのか。今考えると変な話だけど、撒いたおやつを手を使わないで  
「ポップー、ポップー」と言いながら口でじかに食べるのが、楽しくて、  
結局ふたりともおやつを食べられてしまった。学校に上がってからは、  
良く遊び良く遊びで、外の遊びが多く、兄たちから炭団に目鼻とから  
かわれていた。おはじき、お手玉、ゴム縄等は大体女の子の遊び。自  
転車、竹馬、陣取り、縄跳び、台跳び、ブランコ、ベーゴマ、めんこ。  
すぐ上が兄だったので男の遊びも全部できた。それに昔は男の子も女  
の子も一緒に遊んでいた。ブランコは水平になるまで漕ぎ、時には途  
中で飛び降りた。それも柵越えする等、今考えるとずいぶん危険な遊  
びだった。

建築現場に丸太で組んだ足場があった。それが鉄棒の代わり。でん  
ぐり返しとか、逆上がり、腰掛けてそのまま後ろに倒れるのとか、鉄

棒より太い丸太だったのに…。

馬跳びは大將が塀とか大きな木を背にして立ち、チームの子が腰を折って次々につながらる。相手チームがその馬の上を跳ぶ。大体五人位。最後に大將が跳んで相手の大將とじゃんけん。負けたら馬。馬が切れたり、つぶれても負け。跳ぶ方は全員が跳びきれなかったり、跳びそこねて落ちたら負け。大きさも体力もまちまちのチーム。どの子を先に跳ばすか、いろいろと作戦があるわけ。何しろ全員が馬にとりつかなくてはならないのだから。馬になった子は体力もだが、気力もなくてはならない。じゃんけ

んはお互いの大將。負けた場合、味方から責められないだけの信頼のある子になっている。委（まか）かされているわけ。この遊びで培われたものは非常に大きい。

高学年になると近くの子供たちを集めて遊んだ。運動会をしたり、川原の土手の枯草の上をゴザで滑り下りたり、凄く楽しかった。女の子では私が大將。男の子の大將はうどんやの「よっちゃん」。二人とも小さい子の面倒をよくみて、皆で楽しく遊んでいた。リレーの賞品に鉛筆とか消しゴム等、自分たちの小遣いで買った覚えもある。家から三〇分くらい離れた千住新橋の川原にもよく行った。妹と二人で手拭いの両端を持ち、そろそろと岸まで歩いていけると、手拭の中に小さな魚が沢山入っている。川の魚だけではなかった。今考えると海の魚の稚魚だったのだろう。陽に映えてキラキラ光っていた。



母は乗り物酔いが激しかったので、蝗捕りは全部歩き。朝早くお握りを持って、夕方まで一日中歩きづめ。木綿の袋の口に竹筒をつけ、捕った蝗をその筒の中へ押し込む。稲の葉の裏へ、ついつと隠れる蝗を摂る要領を覚えると、面白いほど捕れた。

そんなある日、帰る方角がわからなくなり、歩いてくる人に聞いたら反対方向を教えられ、大分歩いたのに行き着かない。荷車を引いた小父さんに聞いたら「反対だよ。このまま行ったら大変だ」と親切に荷車に乗せてくれた。意地悪な人もいるけど、親切な人もいると心温まる想いだった。足は痛いし、疲れ果てていたので凄く嬉しかった。日頃から人をだますより、だまされる方が良いと言っていた母の言葉を思い出していた。

幼い日の遊びから得たものは大きい。昔は兄弟も多く、遊び相手も沢山いた。遊びの中で気力も体力も養われ、仲間と共に生き、何かを達成する喜びを知った。お金はひとつもかけていない。一人一人の頭から次から次と色々な遊びを思いついた。まさに良く遊び良く遊びで、暗くなるまで外にいた。

今思っても心の底から楽しかったと思う。貧しさは必ずしも不幸ではない。貧しさ故に小さなことに喜びを見出し、心豊かな日々を過ごせた。

私の生きる原点は、そこから生まれたのではないだろうか。